すばらしい環境に満足

きびしい参院選の中だったが

諏訪・川尻分会が合同旅行

よい環境で、日ごろの不満をふっとばして宴もたけなわ。カラオケの合唱とはあまり聞かないけど…。それにしても前の指揮者？が気になりますねぇ。

「……八三年の政治決戦といわれる参議院選挙もいよいよ終盤である。燃えていないといわれ、その集票活動、署名もほとんど話しにならぬ状況の中で、地域分会の全員が行楽に動くということは、三役としてその指導性を指摘されても仕方がない……」

沖分会長は役員班長会議の中で地域旅行の延期を提案した。

たしかに六月十九日は最後の全員行動日になっていた。

「……しかし、どこの地域でも、団結旅行は前もって計画している年一回のレクレーションだから、予定通りやっていい」

「……いや参議院選挙が終ってから実行すべきだ」

会議の中では意見が分かれたが、結局実施することに賛成多数で決行となったことを、まず報告しておかねばならない。

ともかく快晴の日曜日である。午前九時前に熊本菊南温泉観光ホテルのバスが、新港社宅、小川開と迎えにきた。総数五十人（子供を含む）は元気に出発した。

国道二〇八号線の肥後路は緑が鮮やかで、冷房もきいて気持ちがよい。途中、史跡田原坂で休憩する。記念撮影する観光客も多い。

田原坂から菊南ホテルはすぐだった。しょう洒な七階建てで、環境が素晴らしい。バスの中で酒と唄で意気が上がっていたので、全員足取りも軽い。

宴会のはじまる正午までには時間があるので、さっそく散歩する者、温泉につかる者、自由行動である。

熊本市の北十分ぐらいの距離でこんな静かな場所があるとは驚きである。阿蘇の噴煙も望めるという飽託郡北部町鶴羽田――。名前がいい、鶴が飛来して羽を休めていくというから、まだ自然が残っているのだろう。ここは日帰りでなく、泊りがけでゆっくり散策するところだ。

さて宴会は型通りのあいさつで始まり、飲むほどに自慢ののどと踊りが飛びだしてくる。団結とはみんなが参加し、裸になって話し合い、イキが通じるところにまた一つの意義があるものだ。

午後三時まで熱気あふれる盛況だった。とくに、主婦会員のカラオケの唄いっぷりがうまくなっていること、年々その実感が増す。また、年期の入った舞踊も見ものだった。

さあ―明日からまた、地道な地域行動が始まる。声には出さないものの、組織された分会員の一人ひとりが決意を胸に秘めて帰途についたことはいうまでもない。

（左藤臣芳・記）

女坑夫の語り聞きから

その八

納屋学校

十六分会（本所） 武松輝男

「納屋学校対抗の剣道ン試合で、子供が選手で出るときは、オヤジさんの方が興奮してしもうてですナ。

脳天バ割れ、チ言うて、けしかけるでっしょうが」

子供の話になると、頬の筋肉は綻びっぱなしと言ってよかった。

「オヤジさんがですナ、お前は何番目に出っとか、チ、子供に聞こりました。するとですナ、子供が先鋒たい、と返事しよったデス。

するとですナ、オヤジさんが、先鋒テなんか、と言わっしゃる。

先鋒テ言うとは何か、わたしにもわからんじゃったでっしょ。納屋学校に行くごとなると、難しか言葉バ言うごとなるバイ、と感心しよりましたデス」

子供は、戦争で死んだのだと言うと。

「こん子が、オヤジさんに言っとったデス。一番はじめに試合バするとたい」

これからが面白いのだ、と言って頬を、また弛めた。

「一番はじめに試合に出て、みんなバ引っぱっていくとか」

「そげんたい」

「そんなら、試合の鼻曳きバすっとじゃネ」

「違うとバイ。鼻曳きじゃなか、先鋒と言うとたい」

「曳っぱって行くとじゃろもん。そんなら、やっぱり鼻曳きじゃっか」

「おとっちゃん、鼻曳きじゃなかテ言おうが。先鋒テ言うとたい。鼻曳きテ言うとできん。先鋒テ言わなんとたい。わからんネエ」

「そがん言うな、おとっちゃんは、お前ンごと学問バしとらんけんた」

子供に、解らないねえ、と非難されても子供が難しい言葉を使ったことで、まんざらでもない顔をしていた。

親というのは、案外とそういうものであった。よほど社会の道に叛くことをしないかぎり、坑夫の家庭では親子でツッパリ合うということはなかった。

納屋学校は、子供たちの知識を高めた。高等小学校へ行きたい、そういう希望を育くんだ。

「わたしたちの頃はですナ、子供が中学校へ行きたいと言うと、わたしたちよりも、会社ン方が嫌っとりましたバイ

世話方サンが家に来て、坑夫になったがよか、と、ひどうすすめられとりました」

納屋学校は、三池炭坑に、分教場まで入れて四校あった。

いまの早鐘踏切りの手前の、左側の高台に七浦小学校があった。その分教場が亀谷にあった。

万田小学校は、万田公園のすぐ横にあった。

与論島出身の労務者の子弟のために、三川分教場が港クラブの北側にあった。

三池炭坑には、ひとつの決まりがあった。中学校を出た者は、坑夫に雇わないことであった。中学校を出ると、学問があるから、会社のやり方に文句をつけるからであった。

「剣道では勝ったゲナですたい。それも四人もやっつけたゲナ」

（カットも筆者）

小崎氏が『月刊総評』に連載

囚人労働……『読売』が日曜特集

『みいけ』の前の編集担当者だった小崎文人氏が、「囚人労働の実態と今日的意義」と題して『月刊総評』五月号から五回にわたって、囚人労働のまとめ的な研究の成果を連載しています。（『月刊総評』は総務にあります）

また『読売新聞』は六月五日の〝日曜ワイド〟で、囚人労働を概括しながら、小崎さんや武松さん（本紙に「女坑夫の語り聞きから」を連載中）を紹介しています。

「月刊総評」五月号から

「読売」の日曜ワイド

暮らしのヒント

むれぬ靴下で

夏を快適に

陽気がよくなると、体全体が汗ばみ、足も例外ではありません。足はとくに靴下や靴に〝保護〟されているので、むれたり、水虫にかかりやすかったり。

夏にナイロン製の靴下では、汗が発散せず、不愉快です。木綿か麻あるいは、合成繊維を混ぜた靴下なら、洗ったとき、乾きもけっして悪くありません。値段はナイロンに比べて少し高いのですが、不快なむれ（時には悪臭）をやわらげてくれるのですから、損な買物にはならないでしょう。

また麻が混じったワイシャツはポリエステル六五%、綿三五%のものより、千円ちょっと値がはりますが、汗だくでイライラするよりましです。

釣りキチ余談 第二十九回

背を向けるなの巻

石田鈍竿

昭和四十八年十月末、名古屋新日鉄に勤める甥が、休暇を利用して友人を誘い、九州の釣りを楽しもうとやって来た。彼もまた釣りキチである。

長崎県南端の宮の浦から、白亜の灯台を頂きに持つ尾上島に釣行した。ねらいはもちろんクロである。

「天候は悪く、海上は波が高いでしょう」と、気象台の予報だった。休暇の延長はできるかと聞くと、無理だという。せっかく名古屋から楽しみに来ているのだし、それに宮の浦には少々風があっても風裏があって、釣り場に不自由はしない、という気持もあって釣りを強行した。

尾上島は釣り場は低いが、荒れた場合は避難する場所が高く、安心だという気持と、俺はベテラン釣り師だというおごりがあった。

「名古屋近辺でやる釣りとは少々勝手が違うぞ。磯先きに絶対立つな。もう少し退れ。海に背を向けてはいかんぞ。波がグーッと沈んだら何をきておいても逃げだせ。その次は大波で、体ごとうちかぶってサラわれるぞ」と言って、荷物を置いている小高い安全箇所へ仕掛けを替えに行った直後、磯先きで、ゴーッと身体をゆさぶるようなもの凄い波音がした。

瞬間、振り返えると、甥が立っていた場所に、背丈の二倍ほどの大波が岩にドーンと当たりかぶさってきた。幸い彼の友人は俺の傍にいたが、その光景を見て棒立ちになっている。

「しもたあ―」

俺は、頭の毛が総立ってしまった。反射的に磯先きに向かって走り出す俺の眼に、引き波の奥で倒れている甥の姿がある。

流される時、手に掛ったのだろう、必死に岩のかけらにしがみついている。

「大丈夫かーっ」

甥の顔は、あの世を見たという感じで、人間の顔色とは思えなかった。

「ウン、大丈夫。よかヨカ」

名古屋弁を使っていた甥が、「よかヨカ」と自然に故郷弁になっていた。

まもなく、天候を心配して迎えに来た前田栄船頭が、

「石田さーん、調子はどけんなあ、だんだん悪くなりよるばい」

「船ば、着けれーッ。帰えっぞー」

今、想いかえしても、背筋がゾーッとするのである。

甥の根性は、それに懲りず、一日置いた十一月一日、牛深港沖のカモイ瀬で、近来にない好漁と船頭に言わせるほどの大釣果だった。八百グラムから一キロをこすものばかりであった。

「おっちゃん、おらあ―今度ぐらい勉強になったことはなかですばい。海ばなめちゃあでけんと、つくづく思うた」

と言って名古屋へ帰った。

「こんこつは、親爺には言うなよ」と口止めしていたが、三年たった今、時効になったと自分勝手に決めて、書いたしだいである。